鳴門旅行記（上）

上田　雪江

今年も「小鳩農園」と称する幼稚園の畑に、玉葱やじゃがいもが豊作にでき、喜びの中でかなりの収穫を得た。子どもたちと、カレーライスや肉じゃがを作って食べたり、蒸しじゃがいもにして、ほくほくしながら食べたりした。食べながら、お世話になっている人にも分けてあげたい気持ちになり、御近所の人や遠くの人たちにも、少しずつ差し上げることにした。丁度、そんな折、鳴門の先生より電話があり、お互いの園の近況を話すうちに、鳴門は、今年、玉葱が不作だったことがわかった。そこで〝善は急げ〟で玉葱とじゃがいもを送ることにした。このことが、きっかけとなって、鳴門旅行になっていったのである。

鳴門の子どもたちや先生方から、玉葱やじゃがいもを、とても喜んでもらい、子どもたちからも、心ある手紙をもらった。

この手紙を読んで聞かせた。すると、

「ぼく、鳴門に行きたいよ。」

「うん、行きたいよ。」

ふぞく
みなさん。ありがとう。
かれいおいしかった
ふぞくにきてね
だけどみちしらないでしょ
だからまたなんかおくて
ねふぞくよりがよこより

▲▶鳴門教育大附属幼稚園の子ども達からのお手紙

こはたようちえんのおともだち
たきわぎとかどうもあげが
とうかをくらいすおい
しかったよまたこばとよう
ちえんのおともだちにかをくらい
すおつくってあげるね♡

まさみ

「行きたい、行きたい。」
「どうやったら、行けるん？」
「新幹線に乗って行くのよ。」
「わぁ、ええなぁ。」
「絶対、行きたい。」

「お金も要るのよ。」
「千円札が、どのくらい、要るん？　ぼく、二枚持っちょるよ。」
「二枚じゃ、ちょっと足らないよ。十枚ぐらい要るよ。」
など問答をしていて、言葉や目付きが本気であることに気づいた。そこで、
「そんなに行きたいの？」と聞くと、
「うん。行きたい。」「行きたい。」
と連発で言う。そして、
「先生はずるいよ。もう何度も鳴門に行ったんじゃろ。ぼくも行きたいいねぇ。」
そこで、
「鳴門の幼稚園に行きたい人？」
と、みんなに聞いてみた。すると、ほとんどの子どもが手を挙げたのである。
「鳴門に行くと、すぐには帰って来られないから、一つ泊まるのよ。」
と言うと、今まで手を挙げていたのが、半分ぐらい手を降ろした。私は、心の中で『ほらね、困るでしょ』と思った。正直なところ、ホッとしたのである。この調子で、この子たちに鳴門に行くことの大変さを踏まえて、難題を与えていった。
「先生は、これだけみんなを新幹線に乗せたり、ご飯を食べさせたり、お風呂に入れたりするのは大変だから無理かもね」
と言うと、少し考えて、
「グループをつくって、何回も行けばいいわねぇ。」
と言うのである。私も、この言葉には、びっくりしたのである。子どもも真剣になって考えると、生産的に進んでいくことが分かった。そこで、私も素直になって、前向きな問いかけをしてみた。
「でも鳴門の先生が『来てもいい』といってかどうか、分からないよ。」
と言うと
「電話をかけて聞いてみる。」

と言い出し、お手紙に書いてある電話番号を見て

「ここに、かける。」

と言うのである。私も、そこまで言うならば、と思い、その場で私がダイヤルを回して、応対は子どもがしたのである。優しい先生の言葉だったのだろう、

「来てもええと言うちゃった。」

と言うことで、またまた、みんなが大はしゃぎになった。そこで、私は、また聞いてみた。

「でも、お父さんやお母さんが『行ってもいい』と言ってかどうか分からないよ。」

と言うと、

「今日、帰って聞いてみる。」

と言って、その日は勇んで帰って行ったのである。

次の朝、「先生、お母さんが『いいよ』と言うちゃった。」

この言葉に、私は『ドキッ』としたのである。このお母さんは、子どもの話をどの程度、信じて返事をしたのであろうか？　私は、その子の連絡帳をすぐ広げて見た。すると、こう書かれてあった。

＊

よいお天気が続いていますが、暑い中をよく歩いていますね。着替えも毎日のように持って帰っていますが、水遊びなど盛んに楽しんでいるのでしょうね。最近、あまり園のことを話しませんが、今日は「じゃがいもを送った幼稚園に行くのに、お金が千円が十枚も要るんよ。」とか「お父さんから三枚もらって、お姉さんから二枚……」など勝手な算段をしているようです。（笑）それに「側転を教えてあげよう」とのことです。勘違いをしているのでしょうか？

＊

私はこの母親に、その返事として、勘違いではなく、そのとおりであることを書いて渡した。もうひとりの子どもは、

「お母さんに言ったけど、『何のことか、さっぱりわからん。』って言うちゃったから、ぼくは、行かれん。」

と言って、元気がない。しかし、子どもの中では、「先

生、行こうね。」と言うのである。私も『実現させることになると、子どもは喜ぶであろうが、私が余程、腹を決めて、相当に覚悟しないと、大変なことになるぞ』と思ったのである。そんなことをあれこれ考えているうちに、六月二十一日の連絡帳に

＊

鳴門の幼稚園の先生方には、春いらした折に、あやとりの相手をしていただきましたね。いろいろ大変な問題もあるでしょうが、実現すれば、また、すばらしいですね。電話までする機会をつくってくださって、ありがとうございます。今日は、リュックサックまで出しております。

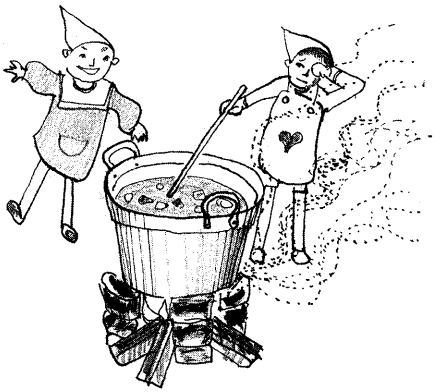
＊

と書いてあった。鳴門行きの願いが、親の間にも持ち上がり、親に出会うと、

「先生、鳴門行きは、いいことですね。うちの子どもも、是非お願いします。」

と言われる声を聞くようになってきた。中には、子どもたちの盛り上がりだけでは要領を得ず、問い合わせも多くなり、いよいよ、大詰めになってきたのである。

そこで、私も本腰で、綿密に計画を立てることが必要となってきた。連れて行ける子どもの人数の決め方であるが、今の時点では、十六人ぐらいが一班で行きたいと言っている。しかし、私一人では、とても面倒を見るこ



とはできない。十人であれば、何とか行けると思った。十人は、宿泊や食事などの費用の計算がし易いし、列車の席にしてもまとまり易いと思った。また、宿泊の場合、一室に十人が限度と考えた。そして、まず、鳴門の幼稚園へ七月十四日（土）にお伺いさせてもらっていいかどうかの、ご都合を電話で聞くと、大変、快く受け入れてくださったのである。ＪＲと宿泊先へ七月十三日（金）の宿泊の問い合わせをし、OKをもらった。それから、親には、クラスのお知らせとして、鳴門行きの話し合いを七月七日に持つことの通信を出した。話し合いには欠席者の方もあったが、出席された方は全員、賛成してくださった。第一班の十名の中に希望される方を聞くと、子どもの希望と親の希望が、ほぼ一致したが、二名ほど第二班にまわり、残念がった子どももいた。翌日の連絡帳に、次のように書かれてあった。

＊

鳴門にもうすぐ行けることを話しましたら、「やったぁ」と、それは喜びました。この春まで「すみれ組になったら、キャンプがあるんじゃろ……泊まるん、いやじゃなぁ」とか、不安そうなことを言っておりましたのに、変われば変わったものです。新幹線に乗ることや瀬戸大橋を渡ること、また、鳴門の幼稚園のことで、小さな胸を一杯にしています。本当に願いを実現させていただき、ありがとうございます。

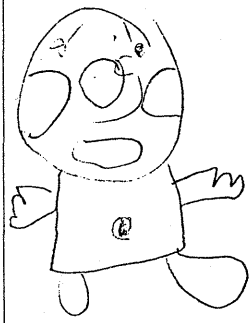
＊

鳴門の幼稚園行き、子どもに話しますと、大変喜んでいました。もう気分だけは四国へ飛んでいるようです。駅までのご一行の送迎の件ですが、第一便だけでなく、この鳴門の幼稚園に行かれるときは、私が責任を持って送迎をお引き受け致します。ご遠慮なく、日時決定する度にお知らせくだされば日程を組んでおきます。せっかくのこういうすばらしい計画の一助となれば、幸せに思います。子どもたちの喜ぶ顔がいっぱい広がるといいですね。すばらしい七夕の日でした。願いが叶ってしまいました。

＊

こんにちは。
ぼくは、ともたけしょうさんです。
ごんどあそびにいきますのし みにしています。
よっていてください。

ワガアタニち



おげんきですか
ワガつ14にちに そちらのようちえんへ
あそびにいきます。おとうさんもおかあさん
んもいってもいいといいました。
ぼくは、とてもうれしかったです。
いまじゅんびをしているところです。
そちらのようちえんには、どん
なものがありますか。いっぱいあそびたい
ですおともだちをいっぱいつくりたい
です。よろしくおねがいします。
さようなら

ながのよしまさ。

ワガつタち

▲◀小鳩幼稚園の子ども達のお手紙

土曜日の会合、大変、お世話様でした。子どもが結果をとても楽しみに待っており、私が帰ってくるなり「どうじゃった？　行ってもええって？　と急き立てるように聞きたがり、「第一班は、とっても楽しみにしていたお友達で一杯になってしまったから、二回目にしてもらおう」と話しますと、少し、がっかりした様子でしたが、親と離れて旅行するのは全く初めて……希望に満ちています。こういう機会を与えていただいて感謝しています。

＊

さぁ、これからは、七月十三日の出発に向かっての準備である。まず、健康管理を第一に考えることで、子どもたちにもご飯をしっかり食べて、よく眠ることを毎日のように話した。そして、字の書ける人は、鳴門の幼稚園のお友だちへ「行きますので、よろしくお願いしますよ。」という意味の手紙を書こうという話をした。すると、六人の子どもが真剣に書いていた。

また、お土産の件についても、

「お土産は、何にしようかね。」

と働きかけて聞いてみた。すると、すかさず、

「ウォーリーの本がええよ。」

と答えた。このウォーリーの本は、今、クラスの中で大はやりであった。自分たちの大事にしているものを、友だちにも伝える気持ちで、お土産にするなんて、とても素晴らしいと思った。そして、出発するにあたっての日程や持参品の書いたものを渡して、家でそれぞれのところで準備をしてもらうことにした。

七月十三日（金）がやってきた。朝の出会いは、もう嬉しくてたまらないらしく、いつも通園道中に出会うおじさんに、

「今日は、ぼく一班で鳴門に行って来まぁす。」

と行って来たそうである。そのおじさんも、何がなんだか、わからないままの挨拶だったようである。午前中は、園生活を過ごし、午後一時に、お母さんに持って来てもらった服に着替えた。そして、リュックサックを持って、午後一時三十分に園の友だちみんなに見送られ

る中で、大きなワゴン車に全員乗って出発！　小郡駅に着くと、人が多く、出会う人出会う人に

「こんにちは！　こんにちは！」

と言い、知らない人は不思議がったり、笑って答えてくれている。さすが私も恥ずかしく、

「ここでは、一々、言わなくていいのよ。」

と、一度は言ったものの、子どもたちの浮き浮きした嬉しさは、隠し切れないようである。改札口に入る時、あわてんぼうの私は、椅子に荷物を忘れかけた。子どもを見送りに来ていた親たちに笑われてしまい、そこで親は、子どもに、

「先生も大変じゃから、あんたたちが、この荷物を持ちなさい。」

と行って、持たせてくれた。それからは、子どもも歩く時は、何も言わなくても持ち続けてくれた。小郡発十四時十五分ひかり十八号に乗った。車内は空いていた。まとまって十人座ったところで、私もホッとした。

しばらくすると、

「先生、耳が痛い。わたし、耳鼻科に通っちょったんよ。」

と言い出した。私はドキリ！　である。親と別れて、もう不安になったのかな？　とか本当に痛いのかな？と、いろいろ頭の中を駆け巡った。その子の様子を見ていると、トンネルに入った。私の耳が詰まったようになった。『そうだ、これだ』と思い、

「唾を飲み込んでごらん。」と言うと、

「あれっ、治った。」

と言ったので、一安心であった。この場合も、とにかく健康面が第一なので、どこかで痛くなったり、変わったことが起こった場合には、我慢しないで、すぐ言うように話した。三時のおやつに車内に売りに来たアイスクリームを食べた。しばらくして、

「先生、お腹が空いたから、お菓子を食べていい？」

と言ったので出発する折、一人のお母さんから「お腹が空いた時に食べさせてください。」と言って、たくさんのサンドイッチをいただいたのを、みんなで食べた。と

てもおいしかったので、瞬く間に、ペロリと平らげてしまったのである。凄い食欲に、私もびっくりする反面、食べることは健康につながるので、とても嬉しかった。食べて落ち着いたところで、おしゃべりをしたり、トランプをしたりするうちに、岡山駅に着いた。

次は、岡山駅から高松駅までマリンライナー号に乗り換えである。迷子にならないように、私の後を付いて来るよう話して、プラットホームを歩いた。後ろを振り返ってみると、二人ずつが手をつないで並んで歩いている。まるで、カルガモの親子の行列のようで笑ってしまった。すると、子どもが大きい声で、

「先生、桃があるよ。」

と言う。私は駅の売店を見て、

「おいしそうじゃね。岡山は桃がたくさんできるところなんよ。」

と話していると、

「先生、そこじゃない。上、上、上を見てん。」

と言うので、上を見ると、何と、すごく大きな模型の桃があった。私は、何度も岡山には来ているが、初めて見たのである。

「まるで、桃太郎さんが中に入っているみたいじゃね。」

と言って。少しの間、それを見ていた。そこへ駅員の方が来られて、

「ちょっと待っててごらん。あの桃を開けてあげるから。」

と言って、その場を去って行かれた。間もなく、桃太郎の音楽が流れると同時に、あの大きな桃が割れて、中から桃太郎が出て来たのである。みんなが口を揃えたかのように

「わぁ、桃太郎じゃあ……きじもさるもいる……」

と言って、とても喜んでいる。こうして親切な駅員さんのお蔭で楽しませてもらって、また、カルガモ一族は歩いた。

——次回につづく——

（宇部市小鳩幼稚園）